

ヴィオレッタが渡した「花」と「恋心」の関係について

応用化学科 2年 出雲沙織

一幕でヴィオレッタはアルフレードに花を渡した。この花をヴィオレッタの恋心と捉えることにする。一幕で渡された花はつぼみで無く開いた花であった。つまり、この時点でヴィオレッタの中に恋心が芽生え、花が咲いていた。○しかし既に開いた花はもう枯れるしかない。この花は2人の短き恋を暗示していたのではないかと思った。

この花が第二幕で登場するのは、ヴィオレッタがアルフレードに向かって彼を安心させるように「笑っているでしょ」と歌った後、「ここにいるわ、あの花と一緒に、いつもあなたのおそばに」と言う台詞のなかである。

しかし、三幕でもヴィオレッタは「笑っているでしょ」と歌ったが、その後自分の肖像画を渡し、○台詞の中に花は登場しなかった。よって、二度目の微笑みを見せる前に、花はしおれていたのではないだろうか。

三幕でヴィオレッタはジェルモンからの手紙の内容を覚えて歌っていた。遅いわと嘆いていることから、それだけの時間が経過したことを示している。これはアルフレードが事実を知ってすぐにヴィオレッタの元へ駆けつけなかったことを意味していると思われる。決闘が行われた後、外国へ逃走するのは、当時としては一般的な対処法であるが、◎出会った時は真っ向から自分の恋心を歌い、他の男を好きになったと言われれば怒って札束を恋人に投げるような良い意味でも悪い意味でも一直線なアルフレードが、事実を知ってすぐに病気の自分に会いにこなかった事は、「アルフレードの愛さえも残されていない」と歌う理由になるのではないかと考えた。二幕において「愛してねアルフレード、私が愛しているのと同じだけ」と歌った彼女は、三幕では自分の愛の方が、アルフレードの愛よりも大きいのではないかと考え、虚しさや悲しみを感じたのだと思う。その結果花はしおれたのではないか。枯れるのではなくしおれたと考えたのは、アルフレードと再会したことで、恋心が少しずつ蘇っていくように思えたからだ。また、○一幕での花がしおれた頃に会おうというヴィオレッタの言葉がここで実現されたと考えることもできる。

三幕でヴィオレッタが「笑っているでしょ」微笑んだのも、アルフレード

が死ぬ前のヴィオレッタの微笑みを思い出すたび「彼女の愛にくらべて自分の愛は小さかったのだ」と思わせようという目的があったように感じる。女ならば、誰かの記憶に残る時、泣き顔や怒りの顔でなく、花のような微笑みで残りたいと思うのではないかと思う。◎現在のものでなく昔の肖像画を託したヴィオレッタなら尚更ではないだろうか。

死ぬ直前、アルフレードの「出来れば僕も一緒に（天国へ）連れて行ってくれ」という言葉を聞いてヴィオレッタは逝った。この言葉を聞いた時、アルフレードの愛の大きさを自覚し、体が軽くなり、満足を覚えて逝ったのではないだろうか。

ヴィオレッタはイタリア語でニオイスミレの意味であり、この花は種子と根茎にビオリンという神経毒を持ち、摂取すると吐き気や神経の麻痺が生じる。○最終的にアルフレードへのヴィオレッタの恋心の花は毒を残していったのかもしれない。